

茨城県立図書館ボランティア
 通信紙 No.26 (2015.6.20 刊行)
 広報委員会編集、県立図書館発行

かがやき

子ども読書フェスティバル開催報告

図書館普及課
 大槻晋吾

平成 27 年 5 月 5 日(火)のこどもの日に、「子ども読書フェスティバル」を開催した。

この催しは、公益社団法人 読書推進運動協議会が「こども読書週間」(指定期間 4 月 23 日-5 月 12 日)に基づき、子どもの視点で、子どもから高齢者まで、幅広く参加していただき、読書に親しみ、読書の喜びや楽しみを知り、主体的な読書活動ができるように、行っている事業である。



茨城県立図書館「ブック・マーくん」

今年度もたくさんの方に来場していただけるように、さまざまな団体の方のお力を

お借りして開催し、子どもから大人(高齢者含む)まで楽しんでいただいた。当日の来館者数は 2906 名にも及ぶ。

子どもフェスティバルで、毎年、人気なのは、県立図書館ボランティアの児童サービスボランティアの協力による「親子でつくろうクラフト教室」。参加した子どもは、ミニこいのぼりの装飾品・フリスビー・コマなど、工作を楽しんでいた。子ども向けに、「スペシャルおはなし会」「本のお医者さん；本の修理体験教室」なども大好評だった。



「親子でつくろうクラフト教室」

視聴覚ホールでは、アニメ上映会「鉄腕アトム」「トム&ジェリー」やミュージアムパーク自然博物館の学芸員による「子ども生きもの講座」テーマ「恐竜ってどうして絶滅したの？三葉虫やアンモナイトのなぞ!？」を実施した。子ども生きもの講座では小さな子どもでも分かりやすい資料でのお話だった。

子どもにクイズ形式で一緒に謎にせまっていくスタイルにより、子どもたちからは、「えっ〜」という驚きの声やたくさんの質問などが飛び交っていた。話が終わった後にも、いろいろな化石などのレプリカに触れたりすることができる時間もあった。楽しい中にも、いろいろな発見や学びがあり、

子どものキラキラした眼差しが、特に、印象的だった。

その他にも、恒例の古本フリーマーケットや県看護協会の協力による健康チェックコーナーの「まちの保健室」などにもぎわいをみせていた。

今回もたくさんの子どもに来ていただき、本当にうれしい。また、子どもは、これを機会に、学校の図書室や近くの図書館に足を運び、たくさんの本に出会って、心をより豊かになってもらえたらと思っている。

今回もたくさんのボランティアの方々に運営やイベントなどで大変お世話になった。心より感謝したい。

広報委員会
桜井 淳

新米のボランティアとしてだけでなく、新米の広報委員会委員長として、図書館職員やボランティアの作業内容を全体的に深く把握するため、さらに、久しぶりに、子供の視線で催し物を楽しむため、記録カメラ撮影係を申し出た。これまで、国内外の登山(日本・スイス・フランス・ネパール(ヒマラヤ)の1500-7000m級85座登頂)の際、小型デジカメで、自然の美しさや不思議さを撮影してきたものの、あくまでも、趣味の世界であり、まったくの素人にすぎない。

当日、旧県庁西側南寄りの入口から入ったところ、すでに、入口沿いと図書館前には、ボランティアの人達が立てていた、季節の新緑をイメージした、十数本の大きな旗が目に入った。それにより、祭り気分がわいてきた。

図書館入口では、エプロンをした職員と



旧県庁西側南寄りの入口の光景



茨城県立図書館入口附近の遠景

ボランティアがあいさつや資料配布など、少し離れたところで、共催の茨城県近代美術館(向かって左側)や生涯学習センター(向かって右側)の担当者も同様な対応をいただけてだけでなく、図書館前の広場には、円形配列に、約20の展示所からなる「古本フリーマーケット」が設けられ、さらに、昼食のためのテント蕎麦屋や屋台ファーストフード屋、その他、郷土野菜販売店も設けられ、活気があり、にぎわっていた。

子供相手の催し物であるにもかかわらず、勤務着のままに対応していた人も少数いたが、催し物の目的を理解し、子供に親しみと楽しさを感じさせるため、たとえば、関係者全員に、頭にうさぎの大きな耳のかぶり物とか、それなりの工夫や演出が、必要なように思えた。もう少し、楽しさを演出しても良



茨城県立図書館入口附近の光景



「館内探検ツアー」1



「古本フリーマーケット」の光景



「館内探検ツアー」2

かったのではないだろうか。

館内に入ると、1階で、子供を引き連れた「館内探検ツアー」のふたつのグループと遭遇した。ツアーガイドが、子供に、どのように語りかけているのか、興味があったので、しばらく、立ち止まって、聞いていた。1階の児童図書室の東側端には「折り紙コーナー」が設けられ、数名が黙って、熱心に、折り紙を楽しんでいた。その近くの「おはなしコーナー」では、ボランティアの人達による紙芝居のようなものが行われていた。対面朗読や子供への語りかけなど、ボランティアの役割は、重要で、大きいと痛感した。

いちばん賑わっていたのは、3階会議室1に設けられた「親子でつくろうクラフト教室」であった。その隣の会議室2では、「本のお医者さん(本の修理体験教室)



「折り紙コーナー」の光景

教室)」が設けられていた。ボランティアによる図書修理は、県立図書館の需要の大部分に対応しており、非常に、重要な役割を担っている。図書修理には、個人的にも、興味があり、さらに、ボランティアの作業内容を把握するため、しばらく、見学していた。地味で、根気のいる作業だが、



「おはなしコーナー」の光景

速く、きれいに仕上げるには、工夫やノウハウが、必要なのだろう。新たな認識を持つことができ、大変、有意義であった。



「本のお医者さんコーナー」1



「本のお医者さんコーナー」2

帰りに、声をかけられたので、1階の中央付近に設けられていた「まちの保健室(健康

チェックコーナー)」に立ち寄り、血圧だけでなく、IQも測定していただこうとしたが、IQは対象外とのことだった。



「まちの保健室」の光景

ボランティア協議会会長
高根沢洋子

2015年5月5日(子供の日)に行われた「子ども読書フェスティバル」に、県立図書館ボランティアから児童サービスと図書修理ボランティアが参加した。通常の活動以外のこのような図書館のイベントへの参加は、図書館職員の方や図書館利用者との触れ合いの中で、新しい発見や気づきをえて、明日の活動の力を与えてくれるものと思う。

参加した分野からの報告として、児童サービスボランティアは、「親子でつくろうクラフト教室」と「スペシャルおはなし会」のふたつのイベントを行った。

「親子でつくろうクラフト教室」では、職員にも、いろいろと協力をしていただき、「おりがみでつくろう」「つくってかざろう」「つくってあそぼう」の三つのコーナーを設置した。どのコーナーもたくさんの人で賑わった。折り紙で作る手持ちこいのぼりや卓上こいのぼり、牛乳パックで作るカラフルなこまやフリスビー、数珠玉の首飾

りやイースターエッグなど、親子で協力しながら、もの作りを楽しむ様子が見られた。

また、「スペシャルおはなし会」でもかわいい赤ちゃんから小学生まで 127 名の子どもたちが集まってくれた。普段の読み聞かせにも増して、大がかりなセットを用意しての人形劇やカーテンシアター、楽器演奏を取り入れた紙芝居など、様々な試行を凝らして行った。おかげで、集まった子どもたちは、一生懸命にお話に耳をかたむけている子、声を出して笑っている子、つぎはどうなるのかワクワクしながら聞いている子など、楽しい和やかな雰囲気の中で行うことができた。

準備はいろいろと大変だが、充実感があり、実施してよかった。秋の読書フェスティバルもみんなで協力して実施できたらいいと思っている。

図書修理ボランティアは、「本のお医者さん」というイベントを行った。「本のお医者さん」とは、家にある損傷した本を会場に持ってきてもらい、修理ボランティアといっしょになって本を修理するというイベントである。普段、図書館の本を修理しているボランティアにとって、年に二度の「本のお医者さん」は、一般の方と触れ合える貴重な場となっている。

このイベントには、さまざまな本が持ち込まれる。親の形見の本、子供が気に入すぎてやぶれてしまった絵本、思い出の小説など。捨ててしまわず、大事に直したいと持ち込んでくるので、思い入れが大きい本ばかり。修理の失敗は許されない。いつもよりピリッとした緊張感を感じながら修理する。だからこそ、修理が無事にうまくできた時、

笑顔をとてもうれしく感じる。大変ではあるが、この「本のお医者さん」をこれからも続けていきたいと思う。

平成 27 年度ボランティア全体会 及び運営委員会開催報告

ご挨拶

図書館長
菊池 章



県立図書館館長菊池章さんのご挨拶
(左隣はボランティア協議会会長
高根沢洋子さん)

この 4 月に着任しました館長の菊池でございます。どうぞよろしく願いいたします。

さて、県立図書館が平成 13 年 3 月に現在の館に移転してから、14 年目を迎えたところですが、図書館は、「知の拠点」として、県民の皆様の生涯にわたる自主的な学習活動を支え、促進する役割を果たす必要があり、さらには、多様化するニーズに応じて、地域が抱える課題解決の支援や地域の実情に応じた情報提供サービスなど幅広い観点から社会貢献することが期待されておしま

す。

そういった中、県立図書館の目指す図書館像として、ふたつの柱を掲げて取り組んでいきたいと考えております。ひとつは「県民の郷土を愛する心を育む図書館」としてサービスを展開する。ふたつ目は「人の成長・学びを支える図書館」です。

これは、県民一人一人が郷土に誇りを持ち、自立して地域の担い手となれるよう必要な知識や情報を提供することで、県民の皆様のお役に立ち、地域に貢献していくことであり、このふたつの使命達成のため、職員一同、日々業務に取り組んでいるところでございます。

ただ、図書館運営は、職員だけの力で出来ることではなく、開館とともに発足したボランティアの皆様のお力は、なくてはならないものとなっております。

10 の分野に分かれたボランティア活動はもちろん、さらに、春の「子ども読書フェスティバル」、秋の「いばらき読書フェスティバル」などの事業へのご協力など、ボランティアの皆様には、日頃より当図書館での熱意あふれる活動に、心より感謝いたしますとともに、重ね重ね御礼申し上げます。

最後になりますが、県立図書館としましては、これからも県内の図書館活動の活性化を図るために様々な施策を展開し、県内の市町村立図書館や関係機関そして団体を通じて読書の啓発活動を推進していきたいと考えておりますので、今後ともボランティアの皆様のご協力をお願いいたします。簡単ではございますが、挨拶にかえさせていただきます。

広報委員会

桜井 淳



会合の光景

会場のボランティア(語源は、ラテン語のボランタスで、「自由意志」の意、無料奉仕ではない)出席者は、33名で、そのうち、女性28名、男性5名で、圧倒的に、女性が多かった(関係教科書に拠れば、ボランティアの一般的傾向として、50歳台の女性と定年退職者が圧倒的に多い)。ボランティアの出席率は24%と意外と低い(2015年4月1日現在、県立図書館公表資料に拠れば、ボランティア135名(重複者含む内訳、児童サービス58名、三の丸書庫10名、図書修理9名、特技を生かした1名、対面朗読19名、外国語整理3名、録音図書23名、広報2名、資料配架21名、郷土資料8名)の30%の40名が熱心に作業分担し、そのうちの80%が全体会合出席)。

会合の特徴は、県立図書館の職員・嘱託・臨時職員が、当日、都合が悪い数名の欠席はあったものの、大部分、自己紹介に参加したことであり、ボランティアとしては、さらに、写真撮影者としては、顔と職務を認識できただけでも、相互信頼を築く上で、大変、良い機会であった。

特別企画

ボランティア活動 68 年

児童サービス・対面朗読・広報委員会
上條 哲

敗戦後 70 年の今年、内閣府・マスコミは、節目の年として、取り上げている。再来年は、私にとって、ボランティア活動 70 年となる。

横浜市本牧海岸で、食料不足の生活に、蛋白質を少しでも確保と釣りの帰途、谷越えに、大勢の子どもの声を聞いた。不思議だったので、山越しに、訪れてみた。戦災孤児(アメリカ軍の無差別空爆により、親を失った子供)の施設だった。50 名ほどが、ボロボロの衣服をまとい、栄養不足の顔に、おできの手足で、庭で遊んでいた。これは見過ごせないと、帰宅後、父(数ヵ月前の戦後最初の統一地方選挙で県議会議員に当選)に助力を求めた。まったくの思いつきだったが、青果市場の野菜屑、米軍兵舎食堂の良質な残飯、米軍家族宿舎の不要衣類などの確保を県庁当該部署に依頼してもらった。他方、私は、学友と土・日曜日に学習指導に行くことにした。その後、6 年間、大学卒業まで続けた。

大学 2 年の 5 月、その施設への途中に、新しい教会が出来たので、見物に行った。牧師と宣教師がおり、牧師は、英語がまったくダメで、宣教師は、英語とフランス語だけで、日本語は、まったく、できないというふたりだった。どうして、そのコンビで、これからやっていけるのかと、不思議な感じがした。

そこで私が「礼拝の宣教師の通訳とピアノ弾きをやらせて下さい」と勝手な申し出をしたら、ふたりは、渡りに船の状況で、早速、依頼してきた。結局、私の司法試験の本格準備に入るまで、1 年あまりの奉仕となった。大学 4 年の夏、司法試験に不合格となり、就職試験に挑戦し、無事、都市銀行に就職でき、札幌に勤務することになって、札幌の育児園でのボランティアに、女性同僚を引きつけて始めた。東京に転勤してから、大磯の混血児施設の奉仕に精勤するなど、とにかくできることなら飛び込み奉仕でも、何でも、やらかす性癖が、私には、あった。

大学 2 年の秋、ドイツ語の個人教授に私のガールフレンドの親友を引き合わせる見合いの世話第 1 号をした。38 歳の時に、縁談のお世話がまとまり、仲人をして以来、37 組の仲人を務めてきた。そのうち 34 組から 70 余人の子どもが誕生し、人口増加に大きく寄与したと思う。

現在も、私の趣味・道楽と自認しながら、独身者撲滅運動と称しつつ、見合いのお世話を度々行っている。

銀行員を脱サラし、商社マンになり、海外にも出かけたが、女性が欲求を満たす最大のものとは呉服だと悟り、呉服商を初めて、大いに成功し、楽しい日々もあったが、瀕死の病に侵され、15 年前、廃業したものの、縁あって、水戸市に転居し、回復後、県立図書館にボランティア登録した。児童読み聞かせ、視覚障害者への対面朗読を担当してきた。

他方、介護施設での高齢者への麻雀指導を 8 年前から始め、現在も、二箇所、高齢者たちと、楽しい時をすごしている。同時に、高齢女性の認知症対策と麻雀教室を開

講し、現在では、満員状況の三箇所となっている。

現在も、奉仕させていただいた方々から、喜びの声を常にいただく。これが私にとって、嬉しい収穫である。あと10年は、健康に留意しながら、いろいろなご縁を活かしつつ、種々のボランティアを続けていきたいと願っている。

編集後記

茨城県立図書館には、過去2年間の利用経験から、原研や東大の図書館にはない特徴があることに気づきました。原研の図書館の利用者の大部分は、研究者であり、利用目的や利用者の倫理が、良く分かっている、図書館担当者は、利用者への対応がしやすいように思われます。東大の図書館についても同様に感じました。ところが、茨城県立図書館の利用者は、原研や東大の図書館の利用者より、はるかに、年齢範囲が広く、職業や目的が異なるため、図書館担当者の対応が大変なように思えます。

そのため、2015年2月から、微力ではありますが、茨城県立図書館ボランティアに応募し、広報委員会委員長と特技を生かしたものの委員会委員長として、茨城県立図書館の業務の円滑な遂行のため、側面からの支援活動に務めています。さらに、できることならば、今後、ボランティアとしてではなく、専門知識(原研で安全性研究、東大で科学技術社会論研究)を生かし、もう少し、異なって視点と制度の中で、図書館の質向上のため、貢献したいと考えています。

利用者として感じたことは、茨城県立図

書館は、使用しやすく、特に、懸念すべき不都合もなく、利用者アンケート結果からも、あらゆる面で、高い評価を得ています。利用効率もよく、図書館担当者の対応も良いと思います。

原子力関係の書籍に限れば、重要な書籍が茨城県立図書館に所蔵されてなく、やむをえず、東海村立図書館から借り出し手続きをしたものが、2年間に、2冊ありました。茨城県立図書館の蔵書には、科学技術や原子力の分野に限れば、重要な書籍が所蔵されていないものもあり、やや、客観性に欠けるように思えます。所蔵書籍の選択については、専門家からなる委員会を設け、客観的な選択ができるように、改善した方が良いでしょう。さらに、全体的に、もっと、蔵書数を増やした方が良いでしょう。

原研での経験に抛れば、昔は、いかなる図書館でも、目的とする書籍を探すのに、時間がかかりました。ところが、コンピュータの普及につれ、1970年代から、世界的に、コンピュータ検索システムが整備され、短時間で目的を達成することができるようになりました。最近では、自宅で、ウェブを利用し、茨城県立図書館のみならず、他の図書館の書籍検索も可能なため、事前に作成した検索結果メモを頼りに、図書館で、短時間に、目的の書籍を手にできます。

茨城県立図書館に、私の著書が、何冊、所蔵されているのか、興味があり、氏名を入力し、コンピュータ検索したところ、19冊も表示されました。単独著書30冊のうち19冊ですから、高い採用率と絶対数なので、多少なりとも、社会に貢献できていることに、やや、安心しました。

桜井 淳